

# 『上野国郡村誌』にみる古墳・塚

外池 昇

はじめに

「古跡」の項目

「古跡」の項目と古墳・塚

古墳・塚の記述

多様性・不完全性

形態・大きさ

村落による改変

被葬者

「名勝」「山」「古墳」「森林」の項目

「陵墓」の項目との共通性

おわりに

註

表Ⅰ『上野国郡村誌』にみる「古跡」の項目の古墳・塚関連記述抄

表Ⅱ『上野国郡村誌』にみる「名勝」の項目の古墳・塚関連記述抄

表Ⅲ『上野国郡村誌』にみる「山」の項目の古墳・塚関連記述抄

表Ⅳ『上野国郡村誌』にみる「古墳」の項目の古墳・塚関連記述抄

表Ⅴ『上野国郡村誌』にみる「森林」の項目の古墳・塚関連記述抄

## はじめに

筆者は先に『上野国郡村誌』にみる「陵墓」(『調布日本文化』第三号、平成五年三月、以下前稿という)を著し、『皇国地誌』の群馬県版である『上野国郡村誌』<sup>(1)</sup>にみえる「陵墓」の項目の分析を行なった。

その際論じたように、『上野国郡村誌』の「陵墓」の項目の記述は内容的に著しく多様かつ不完全性を帯びたものである。即ち、「陵墓」という文言の指し示す概念は、通常天皇・皇族の墓地というものであるが、『上野国郡村誌』においてはそれに加えて、「死事者墓」「招魂墓」「某氏墓」をも含められており、かつ「陵墓」の項目に記述されているものと同様の対象が、「古跡」「名勝」「山」「古墳」「森林」の各項目にもみられるのである。<sup>(2)</sup>

つまり、天皇・皇族の墓地である陵墓、また、今日いう古墳・塚をめぐる記述が、『上野国郡村誌』の中でどの様に位置付けられるのかという問題は、「陵墓」の項目だけでなく、「古跡」「名勝」「山」「古墳」「森林」の項目の記述をも含めて考えなければならないのである。

本稿では、前稿における考察を踏まえつつ、この問題について検討を加えてゆきたい。

## 「古跡」の項目

「古跡」の項目は、明治八年六月五日の「太政官達」の「別冊皇国地誌編輯例則第一号村誌」(以下前稿に倣い「太政官達編輯例則」という)にも、同年十一月十七日の熊谷県の「県達」第四百十七号の「地誌調査例則第一号村誌」(以下やはり前稿に倣い「県達調査例則」という)にもみられる。「太政官達編輯例則」の文言を左に引く。なお、この「古跡」の項目の文言は、「県達調査例則」でも改行以外全く同一である。<sup>(3)</sup>

古跡

某国府址 東西幾町、南北幾町、村ノ何方  
字某所ニアリ残礎尚存ノ類

某城墟 村ノ何方ニアリ、東西幾町、南北幾町、五稜形ヲナシ、或ハ回字形ヲナス、石壁  
猶存シ、遺濠鯽鰻ヲ棲ス、今ニ至リ土ヲ鑿ツモノ、往々古城具ヲ得、年号千支某

氏之ヲ築キ、年号千支某氏之ヲ改ム、克タスシテ去ル、年号千支之ヲ毀ツ等ノ類○興廢旧  
記等、伝ハラサレハ、言伝ヲ以テ記スヘシ、但旧記ノ名、言伝等ハ、明瞭ニ記入スヘシ、

某戦場 年号千支某々両氏ノ戦フ所ナリ、其後  
某々両氏亦此所ニ戦フ、村ノ何方ニア

リ、今桑田ト  
ナル等ノ類

古関趾 大抵上  
ニ倣フ、 古宅跡 年号千支某氏之ニ居ル、某氏某家ニ仕ヘ、某役敵將某氏ヲ斬ル、  
其後故アリテ、此地ニ隱遁ス、某氏ノ伝ハ何書ニ詳ナリ等ノ類、 某廢寺趾 大抵上  
ニ倣ヘ、

これを一覧すると、「太政官達編輯例則」ないし「県達調査例則」における「古跡」の項目の眼目は「国府址」「城墟」「戦場」「古関址」「古宅跡」であることがわかる。

このようないわば雛型を前提に編纂された『上野国郡村誌』の「古跡」の項目は、編纂完了の時点で如何なるものになるのか。両者の間に齟齬・乗離はあるのか。あるとすればそれは何を示しているのか。

表I『上野国郡村誌』にみる「古跡」の項目の古墳・塚関連記述抄は、『上野国郡村誌』の「古跡」の項目から、古墳・塚に関連する記述を要約したものである。以下、この表Iの内容を拠としつつ、前稿でみた「陵墓」の項目をも視野に入れて、具体的に検討してゆきたい。

## 「古跡」の項目と古墳・塚

さて、『上野国郡村誌』の内「村誌」には、一、一四六に及ぶ村・町・組・郷・駅についての記述がある。

既にみた通り、「太政官達編輯例則」「県達調査例則」に示された雛型によれば、「古跡」の項目は「国府址」「城墟」「戦場」「関址」「宅跡」「廢寺址」がその主要内容である。

これらについて数的に検討すると、「国府址」は一ヶ所、「城墟」は一四二ヶ所、「戦場」は七ヶ所、「古関址」は十二ヶ所<sup>(4)</sup>、「古宅跡」は六十七ヶ所数えることができる。そして、「城墟」に付随すると考えられる項目として「壘」「砦」「堀」「要害」「陣屋」「斥候所」があるが、この内「壘」は二十一ヶ所<sup>(5)</sup>、「砦」は十一ヶ所みられ、また「寺」や「堂」は合わせて五十ヶ所<sup>(6)</sup>みられる。

ここで表Ⅰから、本稿で注目する古墳・塚等の記述についてみてみたい。

本稿では、古墳と塚を並べて考察の対象としているが、今日一般に、そして学問的に、古墳と塚は厳然と区別して認識されている。それは歴史学・考古学が追求しようとしている目的、そしてその進歩・発展の結果からは当然のことである。しかし、『皇国地誌』が編纂された明治期の村落、つまり古墳なり塚なりの周辺の社会では、果たしてこの両者が判然と区別されていたのかどうか、慎重な判断が必要であろう。表Ⅰに、古墳と塚の双方を示す記述を一括して収録したのは、このような立脚点によるものであることを、以下の議論の前提として明確にしておきたい。<sup>(9)</sup>

さて、「古跡」の項目中古墳・塚に関連する「○○塚」「○○山」「古塚」「石穴」「古墳」「古窟」「石槨」等の記述は、『上野国郡村誌』の中で五十六ヶ所みられる。もとより史料の性格上数量的統計のみに依拠して論じられるものではないが、古墳・塚に関連する記述が、「太政官達編輯例則」「県達調査例則」に雛型としてみられる「国府址」「城墟」「戦場」「古関址」「古宅」に比較しても、「古跡」の項目の中で小さからぬ位置を有することは、充分に理解できよう。

### 古墳・塚の記述

以下、「古跡」の項目の古墳・塚の記述を分析することにした。とりあえず前稿における「陵墓」の項目の分析の際に提示した、「多様性・不完全性」「形態・大きさ」「村落による改変」「被葬者」の四つの柱を踏襲して議論を進めてゆくことにしたい。

#### 多様性・不完全性

「古跡」の項目は前稿でみた「陵墓」の項目と同様、多様性、そして不完全性に満ちている。本稿で注目している古墳・塚の記述（表Ⅰ）のみが「古跡」の項目を構成しているのではない。「太政官達編輯例則」「県達調査例則」に雛型として示された「国府址」以下やそれらに付随する記述、またその他の諸々の記述<sup>(10)</sup>が総て「古跡」の項目に含まれるのである。

る。「古跡」の項目全体を見渡すと、その多様性・不完全性には著しいものがある。

### 形態・大きさ

「陵墓」の項目の記述と同様、「古跡」の項目の古墳・塚の記述も、その形態や大きさ等の数的記述に周到的な注意が払われている。ここで具体例を挙げることはしないが、表Ⅰを一覧すればその傾向は明らかである。

### 村落による改変

表Ⅰには、古墳・塚の発掘・削平に関する記述が多く見受けられる(①)( )内の数字は表Ⅰ中の傍線の番号に対応、以下同じ)。これらの発掘・削平の条件はもとより一様ではないであろうが、今日いう盗掘・破壊の類とは性格の異なるものと考えなければならない。

このことについては、前稿で既に「陵墓」の項目から具体例を挙げて「村落の再生産構造における古墳・塚の役割」について論じたが、この「古跡」の項目でもそれは全く同じである。どんな些細にみえる発掘・削平の記述でも、個別的、また偶発的な行為としてでなく、村落における何らかの生業の一過程を示すものとして捉えなければならない。ここでしばらく表Ⅰより具体例を抽出して、分析を試みることにしたい。

まず、群馬郡金古駅条をみると次の様にある。

愛宕山石穴(略)往年ハ長凡十五間モ塚形アリシト云、後漸ク破壊シ僅ニ其状ヲ遺セリ(略)(②)

「破壊」のため「塚形」が「僅ニ其状ヲ遺」すのみになった、というのであるが、「後漸ク破壊シ」(傍点筆者、以下同じ)という表現や、「往年ハ長凡十五間モ塚形アリシト云」という記憶が残っていることから考えると、この削平が個別的・偶発的な要因によるものではなく、村落の営為の一つとして位置づけられるべきものであることが窺われる。

次に、勢多郡勝沢村条をみる。

陵ノ形三ヶ処(略)本村中所々其官員方葬祭ノ古跡ト見ヘ陵ノ容ヲナシ、土中ニ横穴有テ刀・矢ノ根等ヲ得ル、今ニ

三ヶ所現存シ、其外ハ農民鑿テ其跡ノミ<sup>(13)</sup> ③

陵の容をしたものが勝沢村の所々にあったが、農民が鑿った為に三ヶ所のみが存しその他は跡だけが残る、というのである。ここでは、古墳の削平の主体を「農民鑿テ」と記されていることが注目される。『上野国郡村誌』では、古墳・塚等の発掘・削平の主体について、「里人」<sup>(14)</sup>・「土人」<sup>(15)</sup>・「村人」<sup>(16)</sup>等と記される場合が多いが、この勢多郡勝沢村条の「農民」の記述は、この削平が農作業の一環として行なわれたものであることを図らずも示唆しており、貴重である。

また、群馬郡保渡田村条には左の様にある。

薬師塚(略)前時塚上ハ村民ノ墓地タリ、天和三年村民此ニ埋葬セントシテ穴ヲ穿ツ、一ノ軟石アリ、鍬ヲ以テ之ヲ鑿ツ(略)<sup>(17)</sup>④

これは古墳の墳丘上が墓地となっていた例で、当然埋葬の度毎に墳丘が掘削されることになる。

この外碓永郡谷津村の場合は、住居建築に関わるものである。多野郡下戸塚村条をみる。

古墳(略)村民曾テ大塚・伊勢山一塚ヲ発キ、金環・鉄剣・佩玉ノ類ヲ獲タリ(略)<sup>(18)</sup>⑤

「発キ」という以上、古墳内に存する何らかの物品を目的とする行為と解さざるを得ない。「村民」が「発」いてその結果得たものが、「金環・鉄剣・佩玉ノ類」であったのである。

甘楽郡相野田村条には、さらに興味深い記述がみられる。

蓮花墳(略)村民嘗テ其東北ノ一墳ヲ発キテ長剣一柄ヲ得タリ、因テ取テ家ニ蔵ス、其家男女八口相尋テ病死スルモノ五人、其人大ニ畏レテ謂ヘラク是劍崇ヲナスナリト、遂ニ之ヲ墳下ニ棄ツ、是ヨリ村民往々怪ヲ説クト云フ<sup>(19)</sup>⑥

「村民」が「発」いた結果得た「長剣」が「崇」をなした、というのである。この「病死」の真相は不明という外はないにしても、右の引用の前段に「此地疑ラクハ永禄・天正ノ古戦場ニシテ、墳ハ戦死ノ屍ヲ埋メシ所ナラム」<sup>(20)</sup>⑦と説明するような古墳を「発」いたことに対する何らかの畏怖の念が、「村民」の間にこのような伝承を受け継がせしめたということができよう。

そして、山田郡東金井村条の次の記述には、古墳の発掘後の処置が詳しく記されている。

菅谷古墳（略）伝云、元文四年発掘シ古器ヲ獲テ官ニ告ク、官其来由ヲ詢フニ知ルモノナシ、乃室中ニ収ルコト如故  
(21) (略) (8)

「発掘」して得た「古器」をなぜ「官ニ告」げたのかは不明であるが、「発掘」の当初から「官ニ告」げることが目的としていたとも思われない。先にみた、甘楽郡相野田村条の「蓮花墳」の例と古墳発掘についての共通した認識を想定することができよう。

### 被葬者

先にもみたように、本稿では古墳と並んで塚も考察の対象としている。塚には人を葬ったものとそうでないものがあり、また、総ての古墳の内部構造に埋葬施設が伴なう訳でもない。<sup>(23)</sup>

しかし、表Ⅰをみても明らかのように、古墳・塚の記述には多く被葬者に関する記述を含んでいる。

例えば、群馬郡天川村条には次のようにある。

双児山（略）碑碣ナク祀祠ナク文献亦其伝ナク、上世何人ノ墳墓タル知ヘカラス、唯土俗伝テ御諸別命ノ陵ナリト云、未タ信拠スヘカラス、按スルニ御諸別命ハ豊城入彦命四世ノ孫也、御諸別命ノ孫ニ現古公アリ、神功皇后ノ御宇矢田部ノ姓ヲ賜フ、今村中ニ寄居・矢田町・高台等地字存ス、蓋往時其邸地ニシテ陵墓タリシ、亦想フヘシ、嗚呼千歳ノ下空ク看者ヲシテ逝水ノ嘆ヲ起サシム、豈ニ遺憾ナラスヤ<sup>(24)</sup> (9)

これについて順序を追ってみると、「土俗」が伝える「双児山」を御諸別命の「陵」とする伝承を取り上げた後、「按スルニ」と関連する史実を実証的に考証し、最後は、「陵」として祭祀されるべき古墳が荒廃しているさまを嘆いて結んでいる。

また、同郡同村条の「石柳山」の記述には、「上古何人ノ墳墓タル未ダ詳ナラス」<sup>(25)</sup>とあり、ともに、被葬者に興味は示しながらも、その特定には慎重である。

それは、群馬郡保渡田村条をみても同様である。

薬師塚(略)何人ノ墓タルヤ未詳、伝云阿保親王ノ墓ナリト、然レトモ証トスルモノナシ、記シテ後考ヲ俟ツ<sup>(26)</sup>(10)「薬師塚」の被葬者を阿保親王とする伝承を注意深く記述した上で「証トスルモノナシ」と、実証的な見地から取り敢えず断定を避けているのである。

そしてさらに注目すべきことは、被葬者を特定する根拠をもたなくても、莫然と高貴の人物と推測している場合があることである。例えば、群馬郡井出村条の「双児山」の記述には「蓋シ貴人ノ葬墳ナル可シ、何人ノ墓ナルヤ詳ナラス」<sup>(27)</sup>(11)とある。

最も詳細に被葬者、およびそれに関する伝承を記しているのは利根郡上津村条である。

寺屋敷(略)本村ノ士眞桃某ノ女如意尼ノ庵跡ナリト云、如意尼容色美ニシテオアリ、幼ニシテ和歌ヲ善クス、父某ノ宿衛ニ從ヒ京師ニ上リ后宮ニ仕ヘ、後花園天皇ニ幸セラル偶振ムアリ、諸嬪ノ妬ヲ避ケ郷ニ歸リ、皇子ヲ生ミ之ヲ奉養ス、「嘗テ<sup>(前除)</sup>勅題石袋ノ歌ヲ詠スルニ方リ『勅ナラバ石ノ袋モ縫フヘキニ』ノ句ヲ得テ未ダ成ラズシテ之ヲ思フ、皇子其乳ヲ啣ミ戯テ曰、イサコイサコト因テ『イサコノ糸ヲヨリテタマハレ』ノ句ヲ得、即チ之ヲ奉ル」<sup>(28)</sup>、幾モ無ク皇子薨ス、乃チ髪ヲ削リ如意尼ト称シ其冥福ヲ祈ル、後チ長享三年三月十四日寂ス、法号宝珠院金后如意尼ト諡ス、皇子ノ葬地ヲ若宮塚ト云、如意尼ノ葬地ヲ姥塚ト云フ、今寺屋敷ノ傍ニアリ、其信否詳ナラザレドモ、里伝ニ拠テ之ヲ記ス<sup>(12)</sup>

しかし、この末尾の部分の「里伝」の伝承の具体的様相がどのようなものであったのか、不詳である。

また同村条には、前稿の表『上野国郡村誌』にみる「陵墓」の項目の記述抄」にみえる通り「陵墓」の項目も立てられている。そこでは、本稿でみた「寺屋敷」の記述と同様に、後花園天皇皇子の墓を「若宮塚」、その乳母(如意尼)の墓を「姥塚」としつつも、「若宮塚」については「其諱ヲ伝ヘズ、其信否ヲ詳ニセス」とし、「姥塚」についても「若宮ノ乳母某氏ノ墳ナリト云伝」とのみ記しているのである。<sup>(29)</sup>



「名勝」「山」「古墳」「森林」の項目

表Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ・Ⅴは、それぞれ『上野国郡村誌』の「名勝」・「山」・「古墳」・「森林」の項目から、古墳・塚に関連する記述をまとめたものである。

この内、「太政官達編輯例則」「県達調査例則」では「古墳」は項目として立てられておらず、『上野国郡村誌』独自の立項といえる。しかし、このような独自の立項は「古墳」以外にも珍しいものではなく、殊更異とするには当たらないであろう。先にみた「古跡」の項目の中でも、表Ⅰにみられるように群馬郡本郷村には見出しに「古墳」とある。ここでは「古墳」の立項も、実態を捉えた文言の採用という程度に理解しておきたい。

ここで「太政官達編輯例則」「県達調査例則」にみられる「名勝」・「山」・「森林」の雛型を改めて掲げることはいないが、表Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ・Ⅴを一覧して明らかな通り、「古跡」の項目に比較して、量的には古墳・塚関連の記述は少ない。まず、表Ⅱ・Ⅴから「名勝」・「森林」の項目の記述について検討することにした。

「名勝」の項目中、吾妻郡新巻村条の「小石神塚」についての記述をみると、ここでの塚が如何なるものか判然としないものの、天明三年の浅間山噴火の際のテフラと「小石神塚」が相俟った景観が「名勝」の項目に含ませたのである。また、「森林」の項目中、群馬郡朝倉村条の「塚原林」の記述をみると、数十の墳塚が松・榛・櫟等の茂る三畝十歩に及ぶ林の中に点在する景観が「森林」の項目に含めさせたものと思われる。

そこで注目されるのが、勢多郡西大室村条の「二兎山」の記述が「山」の項目に含まれていることである。まさに「二兎山」とは「山」の謂に外ならない。巨大な古墳が山の様にみえるのは事実である。

しかし、「唯々千有余年ノ古毛ノ国ヲ平定成玉ヒシ王公ノ御陵址、イツレカ王孫ノ御陵墳ト古来ヨリ俚談スルノミ」<sup>(30)</sup>⑬と、「俚談スルノミ」とはいいいながら、「二兎山」を「御陵址」「御陵墳」とし、さらに、冒頭に「二兎山ト尊称スル」<sup>(31)</sup>とまで記しているのは、「山」の項目の記述に相応しいものとは到底思われない。「陵墓」の項目か、あるいは「古跡」

の項目に含められていて当然の記述の内容である。

この点については、当時、群馬県が前「子山古墳（勢多郡西大室村条では「丁ノ二見山」）を豊城入彦命墓として宮内省に具伸したものの、宮内省がそれを否定したと思われる事実があることをもあわせて考えなくてはならない。宮内省に陵墓であることを否定された古墳を、「陵墓」の項目に含めることはできなかったのであろう。この、豊城入彦命墓の伝承をめぐる国（宮内省）と群馬県との軋轢については、別稿を予定している。<sup>(32)</sup>

### 「陵墓」の項目との共通性

ここでは、右にみた「古跡」「名勝」「山」「古墳」「森林」の項目の古墳・塚に関連する記述と、前稿で分析した「陵墓」の項目の記述を比較してみたい。その際、前稿では「陵墓」の項目の記述の全部を検討の対象にしたが、以下の考察では、「陵墓」の項目中、古墳・塚に直接対応しないと考えられる板碑・五輪塔等を仮に除くことにする。

考えなくてはならないことは、『上野国郡村誌』の編纂において、陵墓、あるいは古墳・塚とは何かという基準となるようなものがあって「陵墓」と「古墳」に振り分けられて記述されたのか、という問題である。果してこの両者の間に記述の傾向に差があるのであろうか。

ここで暫く、前稿および本稿の「古墳・塚の記述」でみた四つの柱のうち、「形態・大きさ」・「村落による改変」・「被葬者」について考えてみたい。

「形態・大きさ」についてみると、前稿の表『上野国郡村誌』にみる「陵墓」の項目の記述抄<sup>33</sup>では、場所・方角・数量・面積等の記述を省略したので必ずしも明瞭でないが、両者ともに形態・大きさ等の数量的な記述には大いに意を用いているといえる。

「村落による改変」に関する記述も具体的で、村落の営みと、陵墓、あるいは古墳・塚との関連について示唆を受ける所は大きい。この両者の記述の間に基本的な立脚点の差はない。

最も注目されるべきなのは「被葬者」についての記述である。尤も「陵墓」の項目について考えると、「陵墓」とは一般に被葬者が天皇・皇族の墓地を指す文言であるにもかかわらず、前稿でも指摘した通り、「太政官達編輯例則」<sup>(33)</sup>「県達調査例則」では天皇・皇族の墓地の外、「死事者墓」「招魂墓」「某氏墓」をも含めて「陵墓」と規定しているのである。つまり理論的に考えると、「陵墓」の項目の記述と、「古跡」の項目の古墳・塚関連の記述の間には、天皇・皇族を被葬者とするものが「陵墓」の項目に含まれ、それ以外のものが「陵墓」および「古跡」の項目に含まれる、という関係があることになる。

しかしそれにもかかわらず、被葬者を天皇・皇族とする伝承のある古墳・塚の記述が「古跡」の項目に含まれることは縷々みた通りであり、具体的には群馬郡天川村条の「双児山」「石柳山」、同郡保渡田村条の「薬師塚」、同郡井出村条の「双児山」、また利根郡上津村条の「寺屋敷」の記述について検討した通りである。ここでは、「蓋シ貴人ノ葬墳ナル可シ」(群馬郡井出村条「双児山」<sup>(34)</sup>)等と、被葬者を莫然と身分の高い人間と想像する場合もあるが、全体に記述は実証的である。そして、被葬者を「御諸別命」(群馬郡天川村条「双児山」<sup>(35)</sup>)、「阿保親王」(群馬郡保渡田村条「薬師塚」<sup>(36)</sup>)、「後花園天皇皇子」(利根郡上津村条「寺屋敷」<sup>(37)</sup>)と明確に示す伝承を記す場合でも、その伝承の真否の判定には極めて慎重である。

また「古跡」の項目中、被葬者を直接明示しなくとも、「陵」「陵墓」「古陵」の文言が見受けられることも注目に値する。

勢多郡勝沢村条には「陵ノ形三ヶ処」「陵ノ容ヲナシ」<sup>(38)</sup>(14)、同郡樽村条の「稻荷塚」の記述には「古キ陵墓ナルカ実跡不詳」<sup>(39)</sup>(15)、群馬郡天川村条の「双児山」の記述には「蓋往時其邸地ニシテ陵墓タリシ」<sup>(40)</sup>(16)、また佐波郡下茂木村条の「丸形塚」の記述には「里人伝此塚古陵也ト」<sup>(41)</sup>(17)とある通りである。もとよりいずれも「陵墓」であると断定する記述はない。

そしてこのような傾向は、「陵墓」の項目でも認めることができる。前稿の表『上野国郡村誌』にみる「陵墓」の項目の記述抄<sup>(42)</sup>でみた「陵墓」の項目中の群馬郡総社町条の「宝塔山」の記述には「古昔貴人ノ墳地ナルヘシ、或ハ云フ、彦狭嶋王ノ墳地ト、然レ共確記ナシ、下ニ上野伝説雜記ノ文ヲ参考ニ附載ス」とあり、「宝塔山」を彦狭嶋王の「墳地」

とする伝承を記しながらも、『上野伝説雜記』を引きつつ被葬者の断定を慎重に回避しているのである。

### おわりに

『上野国郡村誌』には、本稿、また前稿でみた通り、古墳・塚をめぐる多くの記述がある。そしてそれらは、「山」の項目に含まれる勢多郡西大室村条の「二児山」の記述等を除けば、大略「陵墓」と「古跡」の項目に記述されている。このことは前稿で指摘した通り、「太政官達編輯例則」で「陵墓」の項目に「死事者墓」等を含めていることのあらわれである。また、それと同時に「古跡」の項目にも、皇子等を被葬者としたり、「陵墓」とされる伝承をもつ古墳・塚の記述があるのである。

そして、その「陵墓」や「古跡」の項目の中の古墳・塚に関連する記述の内容をみると、共に極めて実証的であり、被葬者等に関する伝承を注意深く採録しつつも、その取り扱いには慎重な姿勢をとっている。つまり、陵墓に対する一種の憧憬の念を露にしながらも、実証的な面では厳格さを重んじているのである。『陵墓』の項目との共通性<sup>(43)</sup>でみた群馬郡天川村条の「双児山」の記述はそのいい例といえよう。

このような筆法は、陵墓伝承をめぐる記述一般の傾向の中で見直してみると、近代に入ってから<sup>(44)</sup>の記述というよりは、むしろ近世的な要素を色濃く反映しているものと言える。このことは『皇国地誌』の編纂を促した明治八年六月五日の「太政官達第九十七号」<sup>(45)</sup>が、「調査方法ハ例則ニ照シ実地ニ参シ行文ノ雅俗ニ不拘質実明晰其要ヲ得セシムヘキ事」としていることのあらわれともいえよう。

もとより、ここでみた『上野国郡村誌』の「陵墓」「古跡」の中の古跡・塚に関する記述も、明治政府の陵墓政策全体<sup>(46)</sup>の中の位置付けもなされなくてはならない。筆者は既に明治初年以降の陵墓の調査・決定について述べたことがあるが、先にみた勢多郡西大室村条の「二児山」の記述が、本来含まれるべき「陵墓」「古跡」の項目でなく、「山」の項目に含まれるに至った背景が、宮内省と群馬県の豊城入彦命墓決定についての軋轢にあることも、このことに関連して想

起される。

村落と古墳・塚はいかなる関係をもっていたのか、そして政府・県による陵墓決定の動きはその中にどのように入り込んでいったのか。このような問題を考える上で、『上野国郡村誌』の記述は貴重な示唆を与えるものである。

註

(1) 本稿では前稿に引続き、荻原進監修『上野国郡村誌』全十八巻(昭和五十二年)〜平成三年、群馬県文化事業振興会)による。また、『皇国地誌』そのものは郡誌と村誌から成るが、本稿では『上野国郡村誌』の村誌のみを対象とする。本稿で取り上げる「陵墓」「古跡」「名勝」「山」「古墳」「森林」の項目は、村誌のみにあらわれるものである。

(2) 前稿八十三〜四頁参照。

(3) 「太政官達編輯例則」は『法令全書』、「県達調査例則」は丑木幸男「解題」(『上野国郡村誌1』昭和五十二年)による。

(4) 「関門」の表記を含む。

(5) この何ヶ所という表記は、一村につき複数の「城墟」なり「戦場」なりが含まれていても、それぞれ一ヶ所として数えている。つまり、それぞれの項目が何ヶ村にみえるか、というデータで、また抹消部分も生かして数えている。『上野国郡村誌』の項目の数量表記は以下同じ。

(6) 「類」の表記を含む。

(7) 「堂山」等の表記を含む。もとより「古跡」の項目中であるから、いずれも廃寺・廃堂の類である。

(8) 「古跡」の項目にはこの外、石・松・碑・堂・神社・馬場・坂・峯・守舎趾・山・墓・牧・関・庵・石塔・池・沼・渡・石仏・石祠・築地・道・樹・井・楓・嶺・陣馬原・櫓・窟・石槌・穴・宿・堤・流鏑馬・岩・地藏・茶屋・岡、また地名にかかわる記述がある。

(9) このような古墳と塚に関する視角については、柳田國男著「民俗学上に於ける塚の価値」(『定本柳田國男集』第十二巻、『昭和四十四年、筑摩書房』所収、同内容細目によれば初出は『中外』二巻八号、大正七年七月)が貴重な示唆を与える。そこで柳田は「一部の学者中には、古墳と塚とは明白に区別の出来る様に考へて、安心して居るものがある。是が第一に誤りであらう」(同五二三〜一四頁)、「見様によつては、古墳の方が、築造の目的が明白であつて、研究の余地もそれほど多くはな

いと言へる。之に反して、塚を築いた民衆の最初の動機に至つては、全然不明と云ふも誇張ではない」(同五一四頁)として  
いる。

(10) 注(8) 参照。

(11) 前稿八十五頁で引用した勢多部下大屋村条の「大黒塚」の例を参照。

(12) 『上野国郡村誌6』一二二―一二三頁。

(13) 『上野国郡村誌1』一四八頁。

(14) 例えば群馬郡綿貫村条には、「観音山」の記述の中に「往年里人穿テ」(『上野国郡村誌6』三十五頁)とある。

(15) 例えば多野郡白石村条には、「滝墳」の記述の中に「土人田圃ヲ鋤キ」(『上野国郡村誌7』一〇五頁)とある。

(16) 例えば山田郡東今泉村条には、「古墳」の記述の中に「村人圃ヲ鑿チ」(『上野国郡村誌16』一三〇頁)とある。

(17) 『上野国郡村誌5』六十二―三頁。

(18) 『上野国郡村誌7』十八頁。

(19) 『上野国郡村誌9』三十一頁。

(20) 『上野国郡村誌9』三十一頁。

(21) 『上野国郡村誌16』一三四頁。

(22) 柳田國男著「塚と森の話」(『定本柳田國男集』第十二卷所収、同内容細目によれば初出は『斯民』六卷十号―七卷二号、明治四十五年一月―五月)の「塚には二種類ある」に、「普通の人は、塚といへば、今日の土饅頭と同じく、総て人を葬つた場所である様に見做して居る。けれども今日まで自分の調べて見た所では、塚の中には、太古から明かに二通りの区別があつて、人間の葬所でなかつた塚が其数が甚だ多い」(同四四四頁)とある。

(23) 茂木雅博著『前方後円墳——埋葬されない墓をもとめて——』(一九九二年、同朋社出版)等を参照。

(24) 『上野国郡村誌4』四十七頁。

(25) 『上野国郡村誌4』四十七頁。

(26) 『上野国郡村誌5』六十三頁。

- (27) 『上野国郡村誌5』九十一頁。
- (28) 『上野国郡村誌13』九十七頁。
- (29) 『上野国郡村誌13』九十五頁。
- (30) 『上野国郡村誌2』三二二頁。
- (31) 『上野国郡村誌2』三二〇頁。
- (32) この勢多郡西大室村条は、その末尾によって「戸長根岸重次郎・副戸長梅沢清次郎・立会人萩原反市」から「群馬県令楢取素彦殿」に宛てて「明治十一年三月」に提出されたものであることが知られる（『上野国郡村誌2』三二六―二七頁）。実はこの時期には既に、豊城入彦命墓としての指定を目指した前「子山古墳等の発掘が行なわれつつあった。このことを考え併せると、「二兎山」は「山」よりはむしろ「陵墓」の項目に立てられていて然るべきかとも思われる。しかし、『上野国郡村誌』に含まれる個々の村誌は、各村から提出されてから政府に提出される迄の間に、県の編輯掛によって補正・編成されるのであり、勢多郡に関していえば、明治十八年七月の段階でも未だ成稿に至っていないのである（丑木幸男「解題」、『上野国郡村誌1』（二十五頁）。つまり、「二兎山」を「山」の項目に立てたことが、少なくとも明治十一年三月当時の西大室村、また群馬県の判断によるものとは考えられないことを、取り敢えずここでは指摘しておきたい。
- (33) 前稿八十二頁、前稿注（7）参照。
- (34) 『上野国郡村誌5』九十一頁。
- (35) 『上野国郡村誌4』四十七頁。
- (36) 『上野国郡村誌5』三十六頁。
- (37) 『上野国郡村誌13』九十七頁。
- (38) 『上野国郡村誌1』一四八頁。
- (39) 『上野国郡村誌2』七十一頁。
- (40) 『上野国郡村誌4』四十七頁。
- (41) 『上野国郡村誌14』三一〇頁。

(42) 『上野国郡村誌6』九十七頁。

(43) 近世における陵墓伝承をめぐる議論と近代におけるそれとの比較・検討については、拙稿「貞元親王をめぐる伝承について」(『地方史研究』一九五号、一九八五年六月)を参照。少なくとも貞元親王の陵墓伝承をめぐる記述にみる限り、近世におけるそれは実証的な立場を重んじて陵墓の所在地の特定については極めて慎重であるのに対し、近代におけるそれは、陵墓の所在地の特定を最大の関心事とするという、異なった傾向を示している。

(44) 本稿でいう「太政官達編輯例則」を含むもの。

(45) 拙稿「明治期における陵墓決定の経緯——皇子・皇孫等の場合——」(『成城文芸』第二一〇号、昭和六十年三月)、同「地方の陵墓伝承と明治政府——明治四年二月の「太政官布告」をめぐる——」(『調布日本文化』創刊号、平成三年三月)。

〔補注〕

前稿の表「『上野国郡村誌』にみる「陵墓」の項目の記述抄」に脱漏があったので補足する。左の部分が、前稿九十八頁の「吾妻郡永井村」項と「吾妻郡厚田村」項の間に入る。

吾妻郡三島村(一一一九三)

古墳 総数八十個 土俗は伝えて神代塚と称する それが誰の古墳か知ることができない 往年嘉永年間に発掘した所金環・曲玉・管玉及び劔・祭器等数種或いは土偶人(古昔の埴輪)等を得る

(付記)

本論文は平成五年度文部省科学研究費補助金(一般研究C)「明治政府による古墳の陵墓指定をめぐる国・府藩県・村相互間の軋轢についての研究」(研究代表者外池昇)の成果の一部である。



表I 「上野国郡村誌」にみる「古跡」の項目の古墳・塚関連記述抄

## 勢多郡勝沢村(一一一四八)(註)

陵の形三ヶ所<sup>①</sup> 朱雀天皇の天慶年間の上野国国司・防人等の官庁設地の郷か その趾目はないが本村中に官長・官員方の葬祭の古跡と見え陵の容をなし土中に横穴が有り刀・矢の根等を得る 今三ヶ所が現存しその外は農民が鑿ちその跡のみ<sup>③</sup>

## 勢多郡田口村(一一三二〇)

字冠木の中部宅地竹林中に塚がある 高さ一丈二尺周回四十間面積百坪の塚で南の左右にまた二つ同じく堆い地がある これを穿鑿すると西南から北東に向う墓穴がある 横の深さ二間天地六尺巾四尺 刀拵川原の青石で積立る この裏詰には六尺余小石で(以下不詳)壘で固めた石室あり 中を石で分けこれに壘を用いる その界二つの中間に太刀・銀輪・鉄類中に白骨が纔に形を残す この奥に入り南面して左に劔と認められる物や巾二寸程の縮器また右の角に太刀類が皆立ってある 数種の矢の根の形が存すがその他の鉄器は皆形を失う 未だ墳中の様子はよく分からない 按ずるに往古和銅元年三月丙子從五位上田口朝臣益人上野守となりその後天平宝字八年三月己未從五位下田口大戸が介となった由が古書にみえその古墳でもあろうか 千年以上も昔で何が正しいか分らないが官庁設置の地か 殊に城郭の敷地の形が西に続き片石が山林中に残る ここを穿つと瓦陶等が今に見られる<sup>①</sup>

## 勢多郡樽村(二一七二)

稲荷塚 字野本にある 高一丈五尺 面積は十坪七合 塚の内に石垣の穴有り九尺四方 塚の腰に瓶を埋めその大きさは口径一尺二寸長二尺五寸 瓶の内に小石を結んである どんな所以か分らない 古い陵墓か実跡は不詳<sup>⑤</sup>

## 勢多郡堤村(二一三五〇)

高山塚 村の中央農家の側にある 今は民有の林で東西十二間南北十間高二間一尺 墟の中石櫃又は石室の類か槌やケヤで打つと鼓に似た音がする 往古摂州高槻の城主高山右近太夫長房故あり加州前田家の預けとなる 後天正十八年豊臣秀吉公の小田原北条家征伐の節前田利長の手に属し信濃口より当国に責入る 爰に北条家の魁将大道寺駿河守父子が西上野松枝城に防戦 父子は勇将で通路を開ず 寄手は苦戦し高山長房は稲荷の爾現を得不思議の奇計をなし松枝城は没落 よって長房は当国の清浄の地に稲荷祠を建立せんと此地に至り召替の鎧を埋め仮に藁で祠を建て櫛を植え是を祭るといふ 今は祠はなく櫛だけがある 旧記はなく言伝えである。

## 勢多都二之宮村(三一七)

新土塚壇址 村の南端にある 東西一町八間 南北二町七間で乾より南に亘り荒戸川を帯び壇址の中心は稍高く登ると西南方は遙に田圃や村里を觀て風色は頗る良い そもそも築城は何氏か不詳だが戦国の時小田原北条氏の旗下新藤備前なる者が住したのが北越の大守上杉氏が来て国中の諸城を陥れた時嘗て小臣の新藤氏であれば上杉氏の為に輒く滅ぼされると その戦争の死体を埋めた塚といひ字八王子にて東西十間南北九間 土人は地獄塚といひ 近くの田畝を耕す者往々古武器を掘出すと<sup>①</sup> 以上階故老の口置である

## 勢多郡森下村(三一六四)

御門塚 村の西の塚二つあり 一つは高五尺周回十間 一つは高八尺周回十間 この西三間ばかりに桜の老樹がありその下から峻崖で片品川に臨む ここから西南は川額村で字イサク原といひ 土俗はミカド塚といひ 伝記等はない この他石を積んだ塚が所々にある 字松ノ木畑から古刀を掘得て正禪寺に納めた この他耕地から曲玉・管玉・鏃を得る事がある

## 群馬郡天川村(四一四七)

双児山 村の南方字二子山前の北にある 高台・寄居・東上・藤泉等の耕地を環らす 東西一町二間南北三十二間周回二町三八間で東西には大小が並び堆く形は殆ど直な瓢を傾けたものに似る その大体の高さは東は三丈五尺西は二丈五尺中間の括れた所は一丈五尺 円径は東巔は七間西巔は六間凹んだ括れた所は南北が四間 樹木・碑・偈・祀祠はなく文献や伝もなく上世の何人の墳墓かわからない 土俗は御諸別命の陵といひが信拠すべきでない 按ずるに御諸別命は豊城人彦命四世の孫で御諸別命の孫に現古公があり神功皇后の頃矢田部の姓を賜る 今村内に寄井・矢田町・高台等の地字があるが思うに往時その邸地・陵墓であつたのであろう 嗚呼千歳の下空く看者をして逝水の嘆を起さしむ 豈に遺憾ならずや<sup>②</sup>

石榔山(カロウトヤマ) 村の北方字高台にある 双子山から北方六七町距たる 新町台・寄居・西隣・天川原村・矢田等の地字を繞らす 楯円で西北から東南に傾斜する 長十五間横八間高丈余 土人の口碑によると中古風雨の為に崩壊して石榔が露出して名づけるというが今はそれは見えない また上古誰の墳墓か不詳

## 群馬郡後閑村(四一五五)

二子山 村の北字坊山にある 形は瓢子に似る 東西二町南北三十間高三四丈周回三町三十六間 今その事績を知る由がない

## 群馬郡古市村(四一〇九)

和尚塚 村の西南字和尚塚にある 高一丈五尺周回七十七間四尺東西二十一間二尺南北九十九間 里伝に古時この塚を祭った時これより西狸塚に向け刹竿を建て列ね綱を張り百燈を灯し祭祀を為すという 『上野伝説雜記』の引用(和尚塚を定恵入定の地とする説)

群馬郡上天大類村(五―一二)

古塚 村の中央にある 高八尺面積八十坪ばかり 上に平石二箇あり 共に長九尺周回三丈余 恰も牛が匍匐するのに似て村人は牛石という この石は奇古で惟うに石棺が破碎したものか 塚の辺りの古樹が枯根や断碑がある 自ら古観を存する

群馬郡保渡田村(五―六二)

薬師塚 村の東方にある 東西三十八間南北二十間高一丈三尺 形は双子山に類似する 巔上は平坦で薬師堂があり傍らに石棺(煉石)がある 長凡九尺巾三尺五寸高五尺ばかり かつて塚上は村民の墓地であった 天和三年ここに埋葬しようと穴を穿つと一つの軟石があり鋏で鑿つとたちまち石が砕け人が竇に落ち出てくると両脚が朱赤に染まり頗る奇怪とした 一老はこれは所謂陵墓であると言った 槌で探ると金属を叩いたような音がし古器数品を得た その中に銅像があり村人はこれを薬師として石棺の側らに一字を建立し今に器物が存する 何人の墓か不詳 伝えて阿保親王の墓という しかし証するものはない 記して後考をまつ<sup>①</sup>

八幡塚 村の東南にある 東西十八間南北三十五間高一丈六尺 形は薬師塚に似る 村人は薬師塚を免いた後にまたこの塚を暴き古器物数品を得た 薬師塚から出た器物と共に収めて西光寺の什物とする<sup>①</sup>

群馬郡井出村(五―九〇)

双児山 村の西北字光明寺の圃中にある 高二丈八尺東西五十二間南北二十三間四尺周回二町三十一間三尺 塚上に樹木生ず 保渡田村の八幡塚・薬師塚と合せ三塚は殆ど鼎足の形なす 蓋し貴人の葬墳か 誰の墓か不詳<sup>①</sup>

群馬郡白川村(五―一七)

彦総塚 村の北方にある 東西八間南北八間高一丈周回十六間三尺 古時より彦総塚という 誰の墓がわからない

群馬郡本郷村(五―一三三)

権現塚 村の東方にある 高一丈五尺周回二十八間東西三間南北三間 字三角に接し飯綱社に隣す 何人の墓か不詳 村人は伝

えて皇孫の埋葬の地という 事跡は伝わらない

古墳 村の南方字大塚の圃中にある 東西十五間南北十三間高二丈三尺周回四十四間五尺 上に神明の石祠がある 何人の墓かわからない

群馬郡高浜村(五―一三九)

古冢 字中尾村にあり 東西三間南北四間二尺 何人の墓か不詳 寛政年間に土人がこの近傍を穿ちその南面に一つの小口を開くという<sup>①</sup> 石窟広五六坪ばかり

群馬郡綿貫村(六―三五)

古冢三所

二子山 字二子にある 南から北に連なる 周囲三町九間高二丈七尺

不動山 字金堀にある 東から西に横たわる 周囲二町三十七間三尺高二丈四尺

観音山 字観音山にある 南から北に延びる 周囲二町五十二間高二丈二尺

これら三冢は一腹で両岡瓢を横にした様である 何の冢か不詳 往年里人が穿ち古劔八口を獲る<sup>①</sup> 長い物は三尺短い物は九寸五分 皆腐朽し今は普賢寺に存す

群馬郡金古駅(六―一二一)

愛宕山石穴 駅の西三国道から西に二町許り入った字愛宕山にある 四面一片の石で造る 周回一丈高凡一丈 往年は長凡十五間も塚形もあったというが後に漸く破壊し僅かにその状を遺す<sup>①②</sup> 里人の旧説には此地は国府の内で古時の上野太守の墓冢であつたという 今は証拠とすべきものを見ず

群馬郡大久保村(六―一三六)

女塚(ヲナツカ) 本村西北にある 里俗伝えて大窪太郎の娘某の故地でその墳墓という 凸状の丘塚があり中に石穴が見える 『平治物語』の引用 按ずるに信夫小太夫の妻となった大窪太郎の娘の墓がここにあるという所伝は不詳であるが姑く記して後考を俟つ

群馬郡祖母嶋村(六―一九九)

祖母塚（ウバツカ） 吾妻山麓に山頂に直立する大石三がある 土人はこの中央を日本武尊・東を妻石・西を武彦石という 『伝説雑記』『皇胤紹運録』に記事があるが後考を俟つ

群馬郡長岡村（六一二二二）

大伴氏古趾 村の北字西帝にある 現在大榎樹の周囲三丈八尺のものがある 年を経て墳冢の状を存しないが昔時からこの大樹を墓樹と唱え大伴塚と呼ぶ 大伴金村は子の忍彦と曾て本村に来て忍彦は大宮神社の祭主となり子孫は世々居住する 今の森田氏はその裔という 村里の旧説があるが記載は詳らかでない 信拠すべきものなし 姑く口碑を存する

多野郡藤岡町（七一八）

蛙塚 社家塚ともいう 里伝に昔町の北に山王祠があり頗る大祠で祠祝数十尺あり 皆祠下に並立した 天正兵火に罹り今猶塚の名を存す 北に宇山王西に祢宜林等の地がありこの説は或いは正しいかも知れない

多野郡上戸塚村（七一五）

伊勢山 前面方で後面円 東西三十間南北十余間高一丈余 後一隅土が壊れ墳が見え墳内は広二十丈余 石礫が底に布き深さは分らない 山頂に神明祠があり故に伊勢山と曰うという

多野郡下戸塚村（七一八）

古墳 大塚・伊勢塚・稲荷塚・熊野山を最とし其他大小六七十丘が村の西北に散在 村民はかつて大塚・伊勢山を発き金環・鉄剣・佩玉の類を獲た<sup>①⑤</sup> 大塚は内が広一丈ばかり高六七尺で大石を積み四壁をなす 伊勢塚は稍小さく四壁は小石で積み各戸局がある 皆南向きで隧道が通ず 何人の墳か分らない

多野郡岡ノ郷村（七一二二）

胴塚 村の北方新町駅首塚と相対す 蓋し神流川の役で戦没した屍骸を埋瘞したのであらう

多野郡新町駅（七一二七）

首塚 駅の南字実見場にあり東方神流川に沿う 按ずるに『豆相記』には天正十年の神流川の役に北条氏直は大いに滝川一益を破り斬首三七六〇余級<sup>①</sup> 氏直がここで検視しこの地に埋瘞した 土人の口碑に因てその名があるという 今塚の下を鑿つと往々鋸鏃の類を獲るといふ

多野郡上落合村（七一五四）

七輿山 村の南環七輿にある 東西二丘西は低く東は高い 隍があり周る 広さ七八間深さ九間 西は方で東は円 蓋し古の埴  
属の葬墳であろう 側に老松があり一株七幹 俗に七輿の松と呼ぶという

多野郡白石村（七一〇五）

滝墳 村の東字滝にある 形は七越（輿）山に類し周隍はない 土人が田圃を鋤き往々金環・曲玉・石剣・斎器の類を獲る<sup>①</sup>

甘楽郡神成村（八一七四）

富士塚 円形で高八尺周回二十五間 里人に何の塚か知る者がない 上に老槻一株がある 小祠を建てて富士の神を祠る

甘楽郡神農原村（八一八〇）

鬼の胴塚 宿尾にある 一宮生弓矢神事に神官が来てこの塚を射る 古より例とする その由る所は不詳

甘楽郡相野田村（九一三一）

蓮化墳 村の西南字蓮花塚に三墳ある 高は皆七尺周回十間ばかり 上に荊棘を生ず 此地は永祿・天正の古戦場で墳は戦死者  
の屍を埋めた所であろう<sup>②</sup> その内二つは白岩村にある 村民が嘗てその東北の一墳を発き長剣一柄を得て家に蔵した所その家の  
男女八人の内病死する者五人 その人大いに畏れ「この剣は崇りをなす」と謂い遂にこれを墳下に棄てた これより村民往々怪  
を説くという<sup>③</sup>

甘楽郡天引村（九一九七）

古塚 口開塚・狐崎・山崎等にある その戸は皆南面しその中で大きいものは十席を陳ねる 四壁は皆石を疊んで作る 狐崎・  
山崎には各一 口開塚には八九塚ある 未だその故を詳かにしない

碓氷郡谷津村（二〇一五二）

古墳 字給人畠と並木字にわたり耕地に散布する 墳の数は四十九であるが今存する数は三十九である とりわけ最大のものは  
稲荷社地である字並木の境地で俗に二千人墳といひ面積百坪余り 最小のものは二十坪余りである 明治二年旧安中藩が土族邸  
を字給人畠の地に建築する際四五ヶ所発き穿ち曲玉・金環・錆腐れた劔鏃・骨片が出た<sup>④</sup> 上古の遺跡であろうが伝記口碑も伝わ  
らない 発いた所は竪二間余横六七尺の方室で四方に石を累積し深八九尺 内に小砂利を充て巨石で蓋をし土砂を堆く覆った小

丘である

碓永郡岩井村（一〇—二〇二）

穴窟 村の西字西ノ平南・字西ノ原の両所にある 形は古墳に類し横八尺許奥行二間余 石を疊積し高五尺余 巨石で蓋をし土を覆い南に口がある

碓氷郡野殿村（一〇—二〇九）

古窟 村の北字峯にある 形は古墳に似る 室の横八尺許奥行三間五尺強 石を疊積し巨石で蓋をし土を覆い南に口がある  
古窟 村の東北字原谷戸と岩井村境に相半する所にある

碓永郡鼻高村（一〇—二二二）

古窟 村の東北字臺に四ヶ所ある 形は三方に石を積み疊んで室とし横口にして巨石で蓋をし土を覆う 中の広さは一坪から三坪に至る 古の墳窟であろう

碓氷郡上豊岡村（一〇—二二六）

笛吹塚 村の西南字花見にある 昔此辺から山名村にかけて鎌倉街道があったという 源義経通行の時この小丘に憩い笛を弄んだのでこの名があると伝える

吾妻郡萩生村（一一—六四）

堺野の塚 字堺野に二つ塚があり小林石見の墓という 大戸手子丸の城浦野三河守の家老の一である 小林・加部・茂木・中沢・恩田・設楽・加部・山田ともいう 邸の跡あり 天正十年九月大戸氏と共に没落した

吾妻郡新巻村（一一—一一〇）

八塚 小石神塚・石動塚・公家塚・伊予塚・金塚 村の東方に散在する 古墳よりハ（八カ）ツ塚と唱える

吾妻郡厚田村（一一—一一四）

遠見塚 高二十丈余周回五町余 本村の東南二十町にある 川戸村境に跨り北方岩櫃山に対する 古時岩櫃城の遠見場であったという

吾妻郡伊勢町(一一一五〇)

笹塚 町の南字伊参にある 高二間周回七間 伝えて伊参笹戸の墳墓という

吾妻郡横尾村(一一一六五)

塚 村の南方三町十五間字小塚にある 東西四間南北五間面積十五坪 南の口は巾四尺縦四尺 窟の中は五尺奥行二間一尺縦一丈余 大石で築き土を覆う 何人の塚かわからない

吾妻郡川戸村(一一一八六)

古墳 本村に散在するもの三十一ヶ所 現今存するもの二ヶ所である 天明五年間浅間焦泥の時大概埋没したという

利根郡大釜村(一二一九四)

古塚 村の西北三峯山麓にあり 入道屋敷と字する 東西南北並に五間面積二十五坪 何の塚かわからない 塚の上に桜の老樹あり

利根郡奈良村(一二一九〇)

石塚 村の南字八幡平に散在するものが三十余箇 その石室の大きいものは三四坪小さいものは二坪許り 皆大石で畳む 匍匐して入る その他石室で潰れ石だけが積み重なったものがある 皆古の葬墳であるだろうが里人が伝える所はない

利根郡天神組(一二一七二)

古塚 六所 字竹花・塚越等にある 何人の墳墓か不詳

利根郡真庭村(一二一五五)

石槨 四個 村の西北二町から三町の間にある 一は高八尺縦一丈横九尺余 三は高六尺縦七尺横六尺 何人の墳であるか里伝はない

利根郡上津村(一二一九七)

古墳 字塚原の前後に散在する 最大のものは高五六尺窟内五六坪 大石で畳し三箇の石で覆う その長七尺巾六尺余許 大小齊しくない 窟口を東にしその製は皆同じ 毀壞するものは無数 この地を塚原と字するのはそのためか その他柴塚・行塚・



大将塚・赤城塚と唱えるものがある。これを発ぎ劔・鎧・古器物を得たという。皆古昔の葬墳であろう。里伝は不詳。

寺屋敷 村の中央字村主八幡社の西にあり今畑となる。反別二段歩。外構の堀跡あり。北方字大原に通じる坂を大門口と字する。

本村の土呉桃某の女如意尼の庵跡という。如意尼は容色美で才あり幼にして和歌を善くす。父某の宿衛に従い京師に上り后宮に仕え後花園天皇に幸せられ娠む。諸嬪の妬を避け郷に帰り皇子を生み奉養した(削除)「嘗て勅題石袋の歌を詠むにあたり『勅ならば石の袋も縫ふへきに』の句を得て未だ成らないのを思い皇子はその乳を啣み戯て『いさこいさこ』といいて『いさこの糸をよりてたまはれ』の句を得て奉る」。幾もなく皇子は薨ず。乃ち髪を削り如意尼と称しその冥福を祈り後長享三年三月十日寂す。法号は宝珠院金后如意尼。皇子の葬地を若宮塚如意尼の葬地を姥塚という。今寺屋敷の傍にあり。その信否は不詳であるが里伝に拠り記す。<sup>②</sup>

那波郡下茂木村(一四―三一〇)

丸形塚 村の東南にある。字梨子木山という。高十六尺周回五十六間四尺五寸。塚上に古い石像があったが近頃遺失した。里人はこの塚を古陵であるという。<sup>①</sup>事蹟は不詳。

新田郡藪塚村(一五―二六)

牛塔 村の東北字石塔にある。伝えている。元久年間鎌倉勤士蘭田太郎成家人道知明。上国に遊びその郷山田郡小倉村に帰る。齋すところの牛がこの地に死す。即ち之を瘞して塔を建て之を表すると。或いはいう。慶安中鎌倉建長寺の石塔を小倉村崇禪寺に徙す。この地に至り車牛死しその塔を遷せない。遂に牛をここに瘞め塔をその側に建てたと。未だ是非は不詳。今塔の側五六間に牛墳がある。

新田郡市野井村(一五―七二)

旗塚 村の東北畑中にある。方三四間高二尺ばかり。上に柿・栗等の樹木を生ず。土人は伝えて新田公の遺跡という。

起請塚・床机塚 二塚は皆旗塚。北方の林中にある。生品社はその北にある。

新田郡寺井村(二五―九四)

赤城社境内古塚 何の塚か不詳。文政年間鑿ち刀・鎧・鉄・鏃の類を得た。<sup>①</sup>刀には菊一の銘があり甲腹に竹葉章がなされる。初めこれを得た時冑臍に金像の八幡を得たがその後人に偷まれる。刀は今村民某の家に蔵し鎧・冑の属は聖王寺にあるという。

新田郡世良田村(一五―一九〇)

二体地藏塚 村の東北四五町にある 高一丈方十間許り 塚上に小竹が多い 石仏二軀あり 之を土人に問うに元弘の初北条高時は世良田の地に素より富豪が多いと聞き黒沼房四郎入道及び出雲介近連を遣し六万貫の賦を募らしめ五日を限り之を弁ぜよといったが義貞は怒り彦(房力) 四郎を斬り近連を誅して之を還した この塚はその梟首の処という 土人がこの塚を鑿つと往々土中に枯骨を見るところ ① よって意うにこの地は古の刑場か

山田郡東今泉村(一六一三〇)

古墳 一ヶ所 字大道東にある 高一丈二尺周回四十五間三尺 石窟があり縦横九尺 その他許多の古塚がある 村人圃を鑿ち哉いは古器を得た① 何人の葬地か不詳

山田郡東金井村(一六一三四)

〔頭注〕「菅谷古墳一条は削る」

菅谷(スケノヤツ) 古墳 金山の麓にある 全状は見えない 伝えて言うには元文四年発掘して古器を獲て官に告げたが官はその由来を詢うに知るものがない よって室中に元の如く収めた② 今はその器物は無い またこれを検するに唯室奥のような所がある 蓋し前時発鑿したものか また何人の墳であるか不詳 その他所々に古墳がある

山田郡矢場村(一六一七五)

古塚 二カ所 一つは村の中央にあり東西五十間南北二十二間高三丈 一つは東方にあり東西五十間南北二十二間高三丈六尺 龜山という また雌山・雄山ともいう 蓋し古墳であろう 相伝えて往昔国家安全を祈るためにこの塚を築くという その説は信じるに足らない

典拠 萩原進監修『上野国郡村誌』(昭和五十二年)平成三年、群馬県文化事業振興会

(註)「勢多郡勝沢村」条は、『上野国郡村誌』中唯一「古跡」と「古址」の項目があり、「古跡」項目には「城墟」の記述が、「古址」の項目には「陵ノ形三ヶ処」の記述がある。表では「古址」の記述を採用した。

表Ⅱ 『上野国郡村誌』にみる「名勝」の項目の古墳・塚関連記事抄

吾妻郡新巻村(一一一一〇)

小石神塚 村の東北にある 天明年間浅間山噴火の時砂石を圧瘞する しかし塚が高く今形を存する

典拠 萩原進監修『上野国郡村誌』（昭和五十二年）／平成三年、群馬県文化事業振興会

表Ⅲ 『上野国郡村誌』にみる「山」の項目の古墳・塚関連記事抄

勢多郡西大室村（二二三一〇）

二児山と尊称する 岡陵が東西に散在し四ヶ所に突立す

甲の二児山 全村中央より戌の方に距たり宇都々城の北に望む宇伊勢山の岡丘に相對する

乙の二児山 村の中央から東に離れ字内堀の林中に峇峇する

丙の二児山 字内堀に岬然とし東南の麓に溜井溝水し池中に突出する塘岸に青松緑柳相映える

丁の二児山 字二児山に突起し東南西の溝渠満水する

なお近郊田野や遠近の諸山は各岡に眺望して風景絶佳の勝地である もっとも乙丙丁の二児山は北から南に連なり三騎道・東山・北山・大門・原の諸字を環擁する また二児山の東麓の溜井は御霊沼という なお甲の二児山の遠近は都々城・西裏・立野・伊勢山・御名久知山等の諸字がある 各山とも往昔から荒廃し埴輪・立物など異なる土器等がしばしば出た たゞ千有余年の古毛の国を平定した王公の御陵址 いずれか王孫の御陵墳と古来より俚談するのみ<sup>①</sup> なお四山方囲山勢その他六月山・ミカド山また数多くの古塚等は別紙鹿絵図に記す

勢多郡東大室村（二二三二九）

五（御力） 霊溜井に接し税地で往古より中二子山と唱え行程凡そ東西六〇間 南北二七間

典拠 萩原進監修『上野国郡村誌』（昭和五十二年）／平成三年、群馬県文化事業振興会

表Ⅳ 『上野国郡村誌』にみる「古墳」の項目の古墳・塚関連記事抄

群馬郡矢島村（五一一四）

石室 村の中央字竹ノ内にある 上に菅原社がある 奥行九尺巾六尺高六尺計 蓋し古墳であろう 里人は反町大膳が築く所と

伝える 後武田氏臣瀬下豊後守四世孫長清承応年間この石室に入り修法百日尋で甘楽郡白雲山を開き悉く社寺を創建 長清羽延  
宝八年八月六日に寂し齡百七歳という

典拠 萩原進監修『上野国郡村誌』（昭和五十二年）平成三年、群馬県文化事業振興会

表V 『上野国郡村誌』にみる「森林」の項目の古墳・塚関連記事抄

群馬郡朝倉村（四一五二）

塚原林 字若宮・旦那坂にある 民有 東西十五間南北三町反別三畝十歩 村の東北にあり松・榛・樽等を生じ薪炭にする 数  
十の墳塚が林の中にあり大きいものは八幡山或いは二子山ともいう 形が似ているためである 高三丈東西十四間南北三十六間  
周回三町余 今その故事を知ることとはできない

典拠 萩原進監修『上野国郡村誌』（昭和五十二年）平成三年、群馬県文化事業振興会